

10. 刈払いだけでニセアカシアを防除できるか？

長野県林業総合センター 小山泰弘

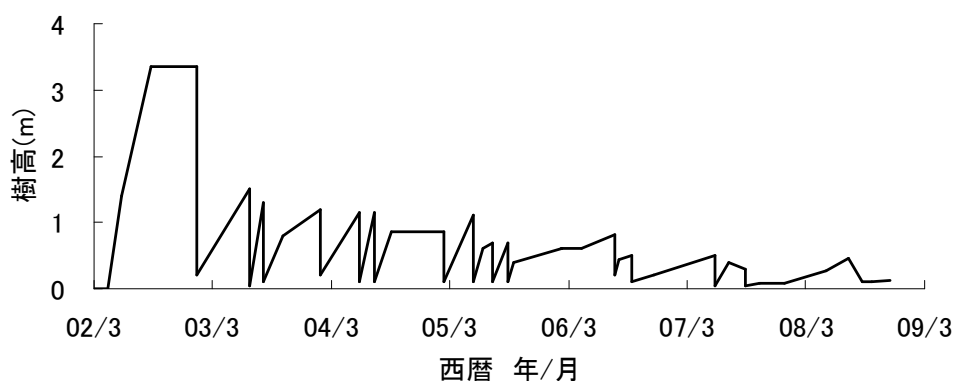
北米原産のニセアカシアは、荒廃地の緑化樹種として世界各地で活用されており、日本でも大正時代から荒廃地の緑化に用いられてきた。しかし、ニセアカシアは繁殖力が非常に強いために在来植生が生育する妨げになるなどの理由で敬遠され、樹種転換を図ろうとする事例もみられる。現在最も有効な樹種転換方法は薬剤散布と考えられるが、水源地域では薬剤散布に対する心理的抵抗がある。薬剤散布によらずに、安易に取り組める方法とすれば、萌芽してくるニセアカシアを刈払うことであるが、萌芽再生するため容易ではない。そこで刈払い回数を増やすことで、ニセアカシアの防除につながらないかと考え、回数を増やした刈払いにより、成長抑制効果を検討した。

調査は、2002年3月に焼失面積170haに及ぶ大規模な山林火災が発生した松本市本郷の被災後にニセアカシアが繁茂した集落近くの5haを対象として実施した。

ニセアカシアは被災1ヶ月後に発生し、当年秋までに樹高3.4mに伸長したため、2003年の1月にニセアカシアを刈払った。その後地域住民との協議を行い、2003年度から当初3年は年3回刈払いを行い、その後はニセアカシアの再生状況を観察しながら継続して実施する事とした。刈払いにあたっては地区住民のほか、企業等からのボランティアを公募して、毎回手作業により実施した。

刈払い作業は、2003年4月から2008年12月までの6年間にわたり、合計15回実施した。刈払いをはじめた2003年は、作業後1ヶ月で平均樹高1mまで一気に回復していたが、年3回刈払いを3年継続した2006年には、刈払い後の樹高が1mを超えることはなくなったため、2006年以降は年2回とした。その後2007年終了時には樹高も50cm程度まで抑制され、発生本数も当初の4万本/haから2,100本/haにまで減少した。2008年は刈払い時期を秋まで延ばして9月に一度だけ行ったが、刈払い直前でも現存量は0.084t/haで、調査地外に認められた無処理木の現存量26.4t/haに比べて激減していた。

6年間で延べ15回にわたるニセアカシアの刈払いによって、発生量を激減させることは出来たが、ニセアカシアを根絶することはできなかった。



図：刈払いを行ったニセアカシアの樹高変化